O-PARTS

涙セカイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｏ－ＰＡＲＴＳ

【Ｎコード】
Ｎ２１７９ＢＡ

【作者名】
涙セカイ

【あらすじ】
謎の工芸品、オーパーツの秘密を解き明かし、オーバーテクノロジーが当たり前のように使用されている４大大陸のひとつ、ボーン・ライフ。
その大陸のとある街、エライトにあるギルドに集まるハンター達。
あらゆるフィールドに出向き、あらゆる仕事をこなす彼らの夢は一攫千金。
しかし、彼らは知らなかった。
その一攫千金のために、世界の均衡が崩れかけていることに……

Episode01－1　紆余曲折－What　Should　I　Do？－

『温故知新とは違うぞ。なぜならこれらの技術は昔からずっと謎に包まれていたからだ。
しかし、２５０年ほど前にとある学者がこの技術とそこに隠されていた秘密を解き明かしたのだ。
わかるな？　それが今の世界のありようの元となっている。よって現在の世界中でこのテクノロジーが使われているのだ－－－－－－』

夏の暑い日中、だだっ広いとはいえ何十人という生徒が入っているサウナのような教室の中。
授業中なんてもはや拷問とも言える。バテない方がおかしい。
なのに教壇に立って教鞭をふるうＤ先生は汗ひとつ掻いていない。
化け物か。あの人。
こっちはもう溶けそうだってのに……

「暑い……」

だめだ。暑すぎる。
しかも眠気がそこまで迫ってきてるし。
ああ、誰かこの拷問から俺を解放して……
なんてことを考えていると、

「ぐふっ！？」

高めの声が右脇腹に痛みを伴う衝撃と共に眠りかかった俺の意識に突き刺ささった。

「今、寝てたでしょ」

痛む脇腹をさすりながら声のした方を向く。
まず目に付くのはウェーブのかかった白髪だ。
顔は小作りで、疑わしそうに俺を見る黄緑色の目は大きく見える。

「寝てない。だけどこんな暑い日に授業なんてされたら……誰だってバテるだろ。
お前は違うっぽいけどな、アリエス？」

そう言ってやると、アリエスは皮肉と嫌味を混ぜた俺の言葉にむっ、と顔をしかめる。
俺と同じ高二だというのに、なんか子供っぽい。

「人を人外みたいに言わないでくれる？　それだったらさ、学校さぼってギルド行ったら？
いつもみたいに」

拗ねたような彼女の台詞にそうしたいんだけどな、と苦笑しながら返す。
俺は彼女の言うギルド――――ハンターギルド　火炎の弾丸（バースト・ブレット）――――に度々学校をさぼって通いつめていたのだが、昨日の夜、突然授業に出ろと担任のD先生にどやされたために仕方なく出ている……という授業に出た経緯を説明すると、アリエスは苦笑を零しながら呟く。

「あー……それなら仕方ないか……」
「だろ？　あのスパルタで知られるD先生のことだ。
……なにされるかわかったもんじゃないしさ……」

確かにねー、と苦笑するアリエスを尻目に今日はギルド行けないかな……とか思いつつ授業に向き直る。
向き直った途端、また眠気が襲ってくる。
……そして、アリエスに通算１０回以上肘鉄を入れられた。

◇　　◇　　◇

「くそ……アリエスのやつ……」

ズキズキと痛む脇腹をさすりつつ、てくてくと歩く。
学校は抜け出してきた。授業中、眠いわ暑いわ連発で肘鉄入れられるわ……。こんなことならD先生との鬼ごっこの方がまだマシだ。
アイツも俺と同じなんだし、察してくれてもいいと思う。
そういうわけで学校を抜け出しギルドに向かっているわけだ。
俺は高校生だけど、ハンターだからだ。あくまで二流だけど。
ハンターーーー簡単に言えば賞金稼ぎだ。害獣討伐や未開の地の開拓、宝探しなどしていることは様々だが、誰もが金と名誉を求め続ける野心家だ。生憎だが俺はその手の野心家ではない。理由としては

……ただ、莫大な金が必要なだけだ。

……高校生の俺には、ハンターじゃなければ莫大な金は手に入れることができない。

そう……そうしなければ……早く、早く金を手に入れないと……

「……っ」

想起（フラッシュバック）。

突然、激しい吐き気と眩暈に見舞われ、たまらず膝をつく。
過去の音と映像が鮮明に蘇る。

悲鳴が聞こえる。焼ける音が聞こえる。爆発する音、斬る音、撃つ音、抉る音……。

鋭い剣が女を切り裂き、わめく男を光が撃ち抜き、たくさんの人(なに)の形(か)が子供を囲む。

舞い散る不透明な飛沫。倒れていく人。甲高い悲鳴。無慈悲で、冷たい、じっとりとした絡みつくような視線が悲鳴が音が声が辛い痛い苦しい怖い来るな来ないでくれやめてくれやめてくれやめてくれ

……たすけて……こわいよラント……

「うっ……や、やめろっ……やめてくれっ……いやだ……」

……苦しくてたまらない。

嫌々をする子供のように首を振り、迫り来る苦しみを必死に遠ざけようとする。
しかし、過去は、記憶は、俺をしっかり捕らえて逃がそうとしない。
まるで磔刑に処されたかのように、動けなくなる。
全身から冷たい汗が噴き出し、吐き気と眩暈が一層強いものへと変わる。視界が暗くなっていく。意識が、遠のいていく……
拳を力の限り握り締め、逃げるように駆け出す。きつく歯を食いしばり、一心不乱に目的地へ向かう。
どこまで逃げてもずっとついてくる記憶(苦しみ)から逃げられる唯一のギル(ばし)ド(ょ)へ……

◇　　◇　　◇

ハンターギルド、火炎の弾丸（バースト・ザ・ブレット）

名前に反して大きな銀色の塔の中にあるギルドは、多くの一攫千金を夢見るハンター達の集う場所だ。

黒い半袖の上着に青無地のTシャツ、上着と同色のジーンズを穿いた俺の格好はいかにも場違いに思えてくるが、構わず中に入る。俺の家でもあるからな。

中に入り荒くなった呼吸を整えつつ奥へ進んで行きホールに入る。ホールはとても広く、壁も天井も強化ガラスでできているから、とても明るい。そして、中には多くの人がごったがえしていて、ホールの奥にある酒場で駄弁っているオッサン達もいれば、２０歳ぐらいの青年が開いている店で買い物をしている俺と同年代くらいの少女もいる。まぁ、全員知り合いなんだけどね。

「……何にしようか」

ホールの隅に設置されたコンピュータの画面に表示されたクエストの一覧とにらみ合う。このコンピュータに表示されるクエストは、４つの政府のうちどれか１つが発令するものだ。そのクエストを達成することで報酬を受け取ることができる。しかも難易度によって報酬が大きく変わる。気持ちは、だいぶ落ち着いていた。

「これでいいかな」

「害獣討伐ランクK。……あれぇ～、イラついてる？」

突然耳元に届いた声に思わず飛び退……けずに後ろに鎮座するコンピュータに頭をぶつけてしまう。

コンピュータの角にぶつけた後頭部をさすりながらぺたんと床にあぐらを掻く。

「……いきなり後ろから話かけるなって言ってるだろアッシュ。
もう何回目か数えられないんだけど」
「アハハハハ！　だってさ、ランタンっていっつもスキだらけなんだもん。
そりゃ、何回もやりたくなるよ」
「……獲物の狙い撃ちはハンターの性ですってか。あとランタンって呼ぶなって。」

ため息をついて声の主を見上げる。
ポニーテールに結った淡いライトブルーの髪、少し大きめの碧眼はいたずらっぽく輝き、猫のような印象を受ける。相変わらずオレンジのジャケットと黒のハーフパンツという軽装だが、俺も人のことは言えないので、言わないでおく。
美人で凄腕ということで有名だが、こいつは大のいたずら好きで、その矛先をちょくちょく俺に向けてくる。そして、こいつがクエストに向かうときは、大抵俺を引っ張っていくか、俺について来るかのどちらかだ。
どうせ、今日もついて行くとか言うんだろ……と思っていると、なぜか彼女は珍しく心配そうな表情をしていた。

「アンタさ……ホントに、大丈夫なの？」

「……え？」
「だからさ、アンタたまにこうやって一人で害獣討伐行ってるじゃん？
そうゆうとき、いっつも苦しそうな顔してる。みんな、それが心配なのよ」

言葉がでない。言ってる意味がわからない。
確かに、俺は前にも一人で害獣討伐に向かったことが何回もある。
内容は、ほとんど大量発生した害獣の殲滅だった、というか昔から害獣討伐のクエストは、それ一筋だ。俺には向いていない仕事なんて事実はとっくに理解してる。

……それに、こいつにそんなことを気遣われる筋合いはない。

「……なんでみんなが俺を心配するんだよ。俺の自由だろ。好きにさせてくれ」
「好きにさせたたからあんなことになったんじゃない。ああなるから、みんな心配するのよ」
「……」

心配そうな目で見つめられ、慌てて目をそらす。
また、嫌なことを思い出すところだった。

……頼むよ、もう放っておいてくれ……

……もう二度とあんな思いはしたくないんだ……

◇　◇　◇

「……疲れた……」

独り言のように呟き、部屋に備え付けられた二段ベッドの上段に倒れこむ。
ギルドがある塔のちょうど中間に位置するこのフロアは、ギルドに住み込んでいるハンター達の家だ。

あの後は結局、一緒に行くと言って聞かないアッシュに押し切られてしまい、二人でクエストを遂行する羽目になってしまった。一人で行きたいと言ってるのに。
出発は明日。目的地まではバギーで3時間かかるため、今日はやめて明日出発する、ということになった。
嫌なことを思い出したのと、アッシュと口論したのとで、精神疲労が限界まで来ていた。
今日は、もう何をする気にもならなくなった。
目を閉じると、幸い睡魔がすぐにやってきてくれたため、そのまま眠ってしまった。

◇　◇　◇

……アンタ、何であんなトコに一人で行ったのよ！！

……お前には……関係、ないだろ……

アッシュの怒鳴り声が部屋に響き渡る。
彼女の表情（かお）は心配やら怒りやらの感情が混ざって、泣きそうになっている。

……俺が大怪我して、アイツが怒鳴り散らしてる
……これは、いつの夢だったかな

3年前のことだ。その日も発作を起こし、大量発生した害獣の殲滅をしようとコンピュータを覗いていた俺は、あるクエストを見つけた。そして、失敗した。
俺はほとんど覚えていないが、そのときの医師の話によると、死んでもおかしくないほどの大怪我だったらしい。俺の容態と行き先を聞いた連中の反応は様々だった。

アッシュとアリエスは激怒し、他のやつらは黙っていたり、無事でよかったと胸を撫で下ろしたやつもいた。
だけど、俺はそのまま死にたかった。
思い出す度に拒絶し、吐き気を催し、嫌ってきたずっと俺を縛り続け、苦しめている記憶と言葉……
もう、思い出したくない。あんな思いはもう嫌だ。

……俺は、何も守れない。

……いや、守ろうとすらしなかった。

……助けを求める妹を置き去りにして逃げた卑怯者だ。

笑い声が聞こえる。
誰のものなのかはわからない。しかし、その中に含まれる感情はすぐにわかった。
俺に対する嘲笑と、侮蔑。

『ヒャハハハハハ！！　テメェみたいなガキが、このオレ様を狩ろうだぁ！？
　昔オレ様に背ぇ向けた腰抜けが、粋がるんじゃねぇよ！　ヒャアハハハハ！！』

「ーーーーーーーーーーーーーーーーっ！！」

悲鳴とも絶叫ともつかない声を上げ、飛び起きる。
身体は熱いのに、背中は氷を詰めたように冷たかった。
午前４時１２分。この時間から行けば開いているだろう。

……会いたい……

我ながら都合が良過ぎると思う。それでも、会わずにはいられなかった。
普段着に着替え、熟睡しているアッシュを起こさないように忍び足で部屋を出る。
薄暗く誰もいないホールを駆け抜け、外へ飛び出す。
目的地は、エライト国立病院。
目的は……
……
……
…

Episode1－（2）　窮途末路－I Don't Know w

ハンターギルド・火炎の弾丸（バースト・ブレット）13階。
このフロアには食堂が存在し、ハンターであればいつでも食事をすることができる。
そのフロアの片隅に、不機嫌顔の少女の姿があった。

「ねえねえ、なんかアッシュ、ピリピリしてない？」
「してるな。ありゃー絶対なんかあったって」
「ランタンに振られた……ってわけじゃーないよね？」

少し離れた場所にいる男女のグループがその少女の顔をちらちらと伺いながらひそひそと何やら話している。
その少女－－－－アッシュは、誰の目から見ても、不機嫌だった。
空になった皿を前に頬杖をつき、そっぽを向くように窓の外を見ている。
窓に映ったその顔は、苛立ちと悲しみを半分ずつ入り混じったようで……どこか寂しそうだった。

「……あのバカ、どこに行ったのよ……」

彼がギルドからいなくなっていることを知ったのは、朝起きて暫くしてからだった。

ジリリリリリリリリッ！

「う、るさ……いなぁ……」

今日の目覚めは、アラームの耳障りな大音響だった。
枕元を探り、自分の携帯端末ーーーープレイターンという三ヶ月前に発売された新機種だーーーーを手に取る。
しかし、そこに表示されているはずのアラーム画面が表示されていなかった。

……鳴ってるの、アタシのアラームじゃない？
……上から？

アラームの音源を特定できたはいいが、疑問が残る。
この部屋を使っているのは自分とラントの二人だけで、他のハンターが入るわけがない。ということは、今鳴っているアラームはラントのものとなる。しかし、ラントはアラームが鳴る前に起きてるし、起きたら7時になるまで部屋でプレイターンでニュースとか見てるし……
思索しながら上段のベッドに上る。やはり、誰もいない。けたたましくアラームを響かせるプレイターンだけが、そこに残されていた。

「……ランタン？」

梯子から飛び降り、クローゼットから愛用のジャケットを取り出して部屋を飛び出す。
フロアの真ん中にあるエレベータへ一直線に駆け出す。
突然姿を消した相棒を探しに……

「つーことらしい」
「……で、結局見つからなかったってことか」
「そーゆーことだな。しっかしランタンのやつ、本当にどこ行ったんだ？」

「いなくなるときさ……いつも朝からいないよね」
「いなくなる前日のアイツの顔色、すっごい悪いんだよね。
何か悩みでもあるのかな？」

「……。」

だんだん聞いてるのが不愉快になってきたため、席を立つことにした。

……まだ、帰ってこないのかな……

今だに行方知らずの相棒（ラント）に向けて、今日何度目かのため息をついた。

◇　◇　◇

時は二時間ほど遡る。
時刻にして６時４０分。
エライト総合病院７階。
『ブレイク・ザ・オーパーツ』以降、脳死や命に係わる大怪我なども治療で治るようになったが、それでもまだ長期に渡る治療が必要であるため、そういった大病を患う患者は、屋上も近いこのフロアに収容される。
そんなフロアの一室、脳死の患者を扱う病室の窓際で私服姿の少年が、まだ陽が昇りきっていない空を見上げていた。
その顔に表情は無く、その双眸はどこか遠くを見つめている。
あの忌々しい夢を見る度にここへ来る。
今この部屋で眠っている妹に会うために……

「何を……何を都合のいい……っ」

……俺は一体、何を考えている？
……過去から逃げて、その過去に置き去りにした妹に、どの面下げて会えるっていうんだ？

爪が食い込むのも構わず拳を強く握り締める。
ずっと逃げてきた記憶が鮮明に蘇る。
意識は、すでに過去を見つめていた。

◇　◇　◇

もう、12年も前の話だ。
俺は、エライトから程遠い街に住んでいた。
都会というほど発展しておらず、田舎というには進んでいる。そんな街に妹のリアンと共に生まれ育った。
家庭は温かく、近所の人は皆優しく、同級生からの苛めもなく、幸せに暮らしていた。
そのときから、街の外は危ないから出るな、と大人たちに口酸っぱく言われていたけれど、遊び場ならたくさんあったし、友達もたくさんいたから別に気にならなかった。
この幸せがずっと続けばいいと思っていた。

……なのに、その幸せは、突然崩れ去った。

ある日の夕暮れ、友達と遊んで家に帰る途中だった。
不意に俺の隣にいた友人が声を上げた。

『おい、あれ……』

隠しきれないほどの驚愕の表情で彼が指差す方角へ目を向ける。
そこには、夕日を覆い隠すように黒煙が立ち上っていた。

まるで、何かの始まりを告げるように

『あれ、火事じゃないのか？』
『え？　でも消防車いないよ？』

周りの友人達が討論をしてる中、俺の胸に不安が広がっていく。

……火事じゃない
……あれは、何？

そのときだった。
建物の影から、足音が聞こえてきたのは。

『おい、足音聞こえるぞ』
『なにか知ってるかもしれない。ちょっと聞いてくるね』

そう言って、髪を二つ結びにした少女が音のする方へ走っていく。

……あ、ちょっと待って！
……行くな、行っちゃだめだ！

言えなかった。
喉まで出掛かった言葉が、一発の銃声でかき消された。

その瞬間、目に飛び込んできた光景は、全てを奪い去った。

少女の身体を貫通する光の弾。
目が虚ろなものとなり、仰向けに倒れる彼女。

……え？

誰も、何も言えなかった。
さっきまで元気だった少女が、倒れたまま動かない。
初めて目にする人間の死。
幸せが、終わりを告げた瞬間だった。

『え？　おい！』

駆け出そうとする友人の肩を掴み、制止する。

『待て。ここから早く逃げた方がいい』
『何言ってんだよ！　友達を置いていけないだろ！』

そう口論してる間も足音は近づいてくる。

『あ……あっ……』

それに気づいたのは、リアンの掠れた悲鳴を聞いたときだった。
そして、その姿を見たとき、俺たちは完全に凍りついた。
そこに立っているのは紫色のアーマーを付けた機械兵。それぞれ右手は銃、左手は剣になっている。
しかし、そのボディには黒い染みがついていた。
刃とアーマーは血に塗れていた。
頭部のセンサーから出た無慈悲で冷たい視線が俺達を貫いて……

『う、うわあああああ！！』

その瞬間、その場にいた全員が悲鳴を上げて逃げ出した。
機会兵が右手を上げる。その先の光線銃から打ち出された光が、逃げ惑う友人達を的確に打ち抜いていく。

人が、仲間が次々と殺されていく恐怖に駆られてスピードを上げる。
走る、走る、走る。
リアンの手を引いて、必死に走った。
あちこちから火が上がっている。人々の悲鳴が聞こえる。
どこへ行っても聞こえてくる悲鳴。
人が襲われているのも目に留めず走り続ける。
後ろを見るのが怖くて、振り向いた途端にあいつと目が合って、殺される。
そんな気がした。

どれほどの時間、どれほどの距離を走っただろうか。
気づけば俺は、どこかの廃ビルの壁に背を預けて喘いでいた。
外はもう真っ暗になっている。
俺の隣でリアンは、俺の腕に縋って泣いていた。
いつもなら慰めてやるところだけど、そんな気分にはとてもなれず、放心したように宙を見る。
ここなら安心かも……そう思ったのも束の間、外から大きな音が聞こえた。
リアンは、なんらかの危険を察知したらしく、はっと顔を上げた。
上からもの凄い爆発音とチェーンソーのような音が聞こえる。

……音がだんだん大きく……？
……まさか、下りてきてる！？

そう悟るが早いかサッと血の気が引いた。
轟音が鳴り響く度、天井からパラパラとコンクリートの粉が降ってくる。
俺は、もう走るのはおろか立つことすらままならない。
そのとき、俺に縋りついているリアンが、掠れた声で呟いた。

俺を今でも縛り付けているあの言葉を……

「おはようラント。早いんだね」

「……ああ、おはよう」

声のした方を向き、返事をする。
俺が追憶している間にリアンは起きていたらしく、無邪気な笑顔で返した。
人工呼吸器をつけていて、点滴を受けている割には顔色が良い。理由を知らなければ、何故入院しているなか？という疑問が出てくるほどに。

「どうしたの？　顔色悪いよ？」

「……なんでもない」

尚も笑顔を向けてくるリアンから目を逸らす。
けど、目聡い妹は逃がしてくれなかった。

「なにかあったんでしょ？」

「……ないって言ってるだろ」

「もう……実の妹にぐらい心開いてくれたっていいのに……」

拗ねたような――――いや、実際拗ねている――――視線を感じながら、アッシュも待たせているし、今日は帰ることにした。
部屋を出ようとするまでずっと注がれていた拗ねたような視線は、スライド式のドアの取っ手に手を掛けたところで、いつもの優しく包み込むようなものに変わった。

「また来てね。お兄ちゃん」

何も言わなければ、もしくは拒絶していれば、もうここに来ることはない。

俺は、ここには来たくなかったはずだ。

いや、もういっそのこと拒絶してしまおうか。それなら楽になれるかもしれない。

「……ああ……」

なのに、返事をしてしまった。

急いで病室を出る。名残惜しそうなリアンの視線も、自分の気持ちも、12年前と同じく、何もかも置き去りにして……

そして、兄が去った病室で、リアンは床に落ちた雫をじっと見つめていた。

「嘘つき。ホントは苦しかったくせに。

ラントは昔からそうだよ。

自分のことなんて放っておいて、人のことばっかりなんだもん。

でも、今のお兄ちゃんは苦しそうだよ。

優しいのに、無理に人を避けようとしてるよ。

無理しないで、私のところに来て。

苦しいことも楽しいこともみんな教えて。

わたしはいつだって、ラントの妹なんだもん」

少女の幼い独白は、白い病室に溶けていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2179ba/

O-PARTS

2012年1月14日09時49分発行